特35-617
1200800187539
特35
617

始

貝原篤信編
西村致忠訂正

訂正家道訓

明治十四年
第十一月刻成

甘泉堂藏

訂正家道訓巻之三

貝原篤信編
西村致忠訂正

人の子孫たる者いかで家乃先祖の家法をよく
ちりて失ないされそだたしひそを孫才力なし
といへともよくそを家をありらていつまそも
出久ちりそを家ハそを家ハ式をしくわ式をを乃
先祖をそれハ才智ありそを上わき
河をるを多くそを能能をつくを家乃
衰へ世のありさを人乃心の善悪人ハ

へ者ゝ紙ゝくゝ書れり。はゝ有ゝ
法ハ必堅固ゝ有ゝ
法をゝ守れゝ申ゝ
法をゝ守れゝ申ゝ
孫ゝ力強ゝ守れゝ
て家と持ゝ
子孫ゝ憐ゝ
ゝの事ゝ
ゝ祖ゝ
ゝ法ゝ

家人ゝ剣ゝ小厳ゝ厚重ゝ
ゝ威ゝ人ゝ
ゝ
ゝ

ゝ剣ゝ
ゝ罪
ゝ
ゝ

人にしたがひて人傷なり人傷乃変くのごとく情ちがふべしいかんやたゝのもの人傷れそれいつくんやたゝのうそをあくしてあくれたるものいやしめるくむ人にしたがふ人のうあわの心を乱して怒りにゆるすべしを己を抑さあ人を抑さむるを失なへるといふ。怒甚しけれども必見ればいとげとべとあくくして人をいかむるふいとう。君子

乃ちまざ。のくのあく心をとりみてして足るしりくるくまでみるべきわの意をまれ。孤辱にあひくるとおそれおくおもひいるまうくくて心服をしたゝ。下新よあやまりのらい只後容くして。城をいはまれわ西さは彼人ゝあくへ感通をくへ

家をあさむるあもを下情よる通をとうくとくとゝ。下情よる通をくへ下つるの人のうきひくるくを意曲直のあるを安

くゆるゝ事なかれ。ゆゑ乃うれしく
ゐるゝことあるべき。然もけらいとゐるも
権勢あり家の賓客を司る家僕なり。人の
権勢ほこるべし。礼わゝく実あるべし。
主人より附ゝ人をつきく礼を戒むべ
し。家僕よまゝ世ゆくへゝ。家僕乃礼
礼をいやしむる人をそし
ゐ。主人見識ゐけ人なんや
人のいまゝあい防のゝ。大ほとゝせんゝあ

ゝ見てゐの附ゝとゝきとけへ。ゆゐの
まゝひなゝ。人まゝの法をけまゝいうまゝ
ひ乃まゝ。ゆゝ人まゝ。人家の内をわゝ
きゐ者婢女奴婢のゝいまゝ。ゐまゝ
出来ゝ附ゝ。礼法をゝく。内外上下の
ゝゝあゝて家法とゝ。ひくゝ
法をのゝゝとゝ。ひくゝ。ゆを教乃
為ゝ。ゐ附ゝゐゝ。ゆゝ杖ゝ。ゆ
まゝ世ゝく教色とゆゝ。拙息のゝとゝ

小さきれいはかさなりわさらひ出くるものも
悪事出来ぬはい世をえうしぶく
せもれいはうくくそむく。新く推が物を初
来たるをえ子供業孫よりゆくえしも
世をさちぶくめよゆくふをけはちうを
男ひとりして先をうを多し。来代をくうんと
すれいちくくなくして
古稀よ。一物あまとハ一累ふとをくりぶ来本
多獣黒物ちとぶのふくも一向よこのくるを

をは必ず物よ心をうられぶるハのをつ
ひとをふるをぶをこのあハひをと紋を
とつゆ下人をるやふ代。この代されいるす
すれくくてよ。先をつくいを成ちた
人父の家よりて孝行をひをちを人皮
職をあづる人藝術の家業ある人ぶ田
多れ人いを心と清くく事をとをふと
してさ面りくる職分をとつくむく事と
ねくを物を抜入るくくぶるとこのくく陸

とていやせぐ。わの身よさしあらうる職分のつとわるよい必うとくなる小四といまめくぶしろくの虫毒などおそそ人れ雲よたくはちるいさ猫とろうさしむからとぶ生まれとくるまむうしたず猫新鮮なくれるやすいくうしたず仁あて見くうしたねのいのちとれいた夫さようむくるとぶ幼かのはしうやくとえいまむく常見居るちよい湯よ白い法よ背くへしぬ講分

きい日の光ぬくうぶ月よむうひ夏ときしく。冬あくうわてみ身と居るよ宜しぶ又居宝も在中もつよ掃除ていくれよく。すしぶくのめくよれく家式居ひ色とふた。ようしぶくけうつうれい心まの居ふ。らとぶ居りちよくうけきい元まとふくぶ。基ぬうるれて精神とあるぶ居るちようさう。とこのめい熟式出きし人の家居い美富よようしぶ身のちうおせく

きりそうしやせんせいきハつゐ家ときく所ゆゑ
なくして行ゆゑ富ましたりしも家用ハ屋
作ひろくすゑうしれ家ゆゑうるとくい通行るや
こゝを掃除よ家人のつとめ也ゆゑ修理も
ひつりく紙乃費多ゆゑ家用
ときて常ゆ用ゆる所ゆゑ
はのゆゑ家居ハ只堅くいたよしして
うぶりたれゆゑとゆゑひ月を去るまはは
紙と多くゆゑ又くゆゑある人ゆゑ生れ付て

仁ゆゑ家ゆゑ門乃子孫のゆゑとお
もひて兵衛乃ひ人をたゆゑ紙室
と多くゆゑ子孫よ祖さんよりハ紙をゆゑ
度くゆゑ兵衛乃ひ又母兄弟親戚よあり
くしゆゑ紙の人ハ貧とすひ飢寒を助く
へしゆゑ紙ハさいゆゑ子孫のゆゑ紙衣のこ
ゆゑ甚ゆゑ
子孫牛馬のゆゑ家ゆゑ生れ付ゆゑ品不肖な
きハいゆゑ教えいゆゑめてもゆゑ不法改

らとゝいさめ給ふをくるしみとゝいさ
むれいろ〳〵いよ〳〵ひさうしてそむき
不和をいたす。ゆゑいかなるぞんだゝ
いてわとゝ失はざるにたゝひくあくま
れ出るい。産業とゝ
うゝと。荒廃のゝ
し。産人頑たるゝ
くのゝ。毒よの井ゆやら人ぐゝ。あん
ゝ。ゝ

おゝて乃人名をゝ生れ付る偏性あり。
ゝ妻子をゝべよゝ
あゝあわをいよゝ
らゝあゝゝとゝ
せあゝゝ人の生れ付るゝ
ゝるゝとゝゝ
とゝえゝは
教ゆゝ。
庶人ゝ

れゆゑ一ぺんに人のつゝしまれいぺんにつゝしむ
人のこゝろがくのこゝろに人は必ずくのゆく事と
まるものゝことゝまるへ一ぺんにとゝまるへ
わゞとゝつかなるれゝ一ぺんにまれまれつゝしませ
乃人を多くゝるゝ多くゝるゝ事ばかりをくわとれ
さる人をきいわくくまれちゝ人は一人も
有ゝて是ゝ人のつゝまれるひとゝとゝ
へ一ぺん事とわとれさる人わゝいを人る
る人一ぺん乃事とゝけいを人くまする人へ。

必ひとへ一ぺん事とゝはゝ
是ゝ人のひとゝ
言事といゝひゝ事
といむい人情なり。延辰　嫁要といゝ
ひゝ死亡とゝひゝすむ人ちゝぺんとゝも
人へ去ゝつゝそゝれゝさゝいゝゝぺんひ
ゝ一いゝるゝ害わゝ天命とゝ
らゝて福を求め禍とのゝまんゝゝ
私ゝゝ乃ゝゝ福の祝とゝゝ

して地ろを迷つるなり。仏佛を見てさりに
へつらひいのりてさいとりむるを又回
年わすれていまぞ世変をもしびて知るなる
き人をも忘人のもいはゆるをく今時の
風俗に叶りて時あしけれ世ひてさ
くるときしひ又祖とをいつろり
ちやとしをわるさ老いたるひオカあり
ても世変とちしに知る毒せられむ人
のとろあるふもし及くしぞれ時をを

理をもしぞくるふるれをむく後。
又祖の言理あるを事をもろ
凡家の主人ふを身を世さめく
家を世さんてしに代志をしまの釈先
祖より代をわる孫と財と失しを作
てよくたるを老をしつるけを
と笑ありて失るふいらしに及しぞ不
法ありてこれ財孫と失ひ或財孫
をつしたを大なる不孝なり。家業とよ

くつろめくおこたり侯ゆへ
とぞ第のもつてしるそ
しるとよくおさめ
かりそ志ある者ハ
つりそ志うけ
こと
居るものの宝の用ハ
八年老ても
十ハの用ハ
とくのもつて。奴婢と男女ハ
ものと身とをとり色労して
もそ上奴婢ハ又
きしてより。
くのわくをへし況
ぬ奴婢を
ものとをくしてより
乃ちやうるくして
一事をつけ

ものの心
ものを

ふくき事あらいたらひ出すべく。迫どうさう用
よをはいぐとなん。二ものを事とするさしむへ
し。奴婢ひとりあるはハ公儀用ひを
ちくあづけるべし。あるさしむへきうをとをつき
ひて迫をそなはせひ出し。ちくくしん
て事と合をとれいぞうの身も奴婢も事
ちきくいとりりくちくひとれし。是人を
つりふをを用ひさるなり。奴婢をも又
を人のおよいそく事をつとりおりハ又

何事をあらいつとんとひ用ひ
きづそふつめくを人の合をとうひ
ちをしはちそなはる用ひんいちくちく
るし

ちつれちき侍よ家事後寛を福自
厚をいつ。宮をいせしめいたるめいた
ひるゆをちふて人のるをゆうをとをぬく
のをを人い福あるをしてせちくを
人い福をくれしをそひるき家よハさい

とつあり心ゆるやうふたりある人いさい
くいたづらなるこの多く
あるよ居くも国よりてもこれ行ひ道ふみ
ちくうふ行く乗しひ人きるれしはしめへ
つまりくいて若を行るよへくくく行
ひくふくひたれあるとい賢者ふいてくさ
まくも若を行るくちりぬ才芸
い雑すたり。初い面白くくれもくくく
習別あまい居ちゝ初りてしくんやよれ

道を行ひ業をはあるよ乗しかくとや
初りうれを人をうくみやまし有よ史紀日。
知あまい雑く人をうくくくいたくくむへたる体
うふ。知ある人ち人乃わのをるいさるる
ある式をあるんと初ひ人ととりあに
或人乃ちくくのそよるむくるへまれ付て
初りうある有くちひく人とゆるとたく人
ぐ赤子乃弁まへくんとを居りあくるれ
ハたりく人の生付徳るれを行ふ

かくれ。智者ハよく備ある故。おそれなし。さる
ときありていそがハしからず。此家のまとなる人ハ此心得
あるべし。親戚家人まで心に叶ハざるをとがめ
いかりて堪忍せざれバ家道和睦なら
園に草木をうへて愛するも一入心をなぐさむるに
一助なりといへども破あることおかしを用てある
みだりに求めてあまれる物をうくべし。物ごと
に物数寄のなくゆうにしてみだりに人にこひ
もとめあさひて多くつひやし。其家の禁をさ

花のさかりなるほどに。花のよしあしをわきまへ
ひそかにしむるハ。事多くたらぬなれバ
ひとかり。心術をそこなひ。是非にハあ
まで芸にして我家の務なり

園にうへる草木ハ要あるをえらむべし。又まけ
きハむべからず。但ハ木まんべんくひいつくさきの
木は。果樹花木薬樹なくば植て四時の推
移ると節るべし。又果と穀なくして家業
のうれへ実あるとりてまし。人にあたへよ

用多し。菜ハ菜蔬花草などうへてその
品をしげり花を翫ぶべし。居室の小園に
ハしげりさる常盤なる小樹をかぎり植
て所せきほどなりしむべし。小園の内ハ草木多
くれバむさくるし。又庭に草木しげきハ陰
氣多く夏ハ蚊虫多くして人をそこなふ。
家園に花草木をうゆるハかりそめの事と
思ふべし。ひまに楽しみをなすべし。心を費
やして心を労し功を費し家僕を労せ

しむるハ心を苦しめ物をついやし人をくるしむる
わが財を費すまでハ損ありて益なし
花草などをうへしむるハ労多く活しがたし。さ
れども物ごとに植べき所を心得て植べ
し。心得されバ後日よくつちかふべきとしてよし。
草木をうへつくろふハ手間多くむつかしく
功をつひやす。其上にうゆる所なくしておほう
べき所多からんで年を長して枝葉てよ
きなり。然木との間はしめに

西をとりいれてみるにはかれば長し
てをるとはなをさくなり西をとりいれ
つをはなくい枯るもの也けくさうへを
西をはなをとりいれ久くしてさうへ長しる
本はへやむるとはうをつくりしたをは
なをんとしてるはぬむぐるしたり小本は
をうへうへ西をはぐるとへ長義をさるは付
ふくうをとへしぬ本はうへしても活をとし
宅はけあくうへぬんをあく果をとうへ

しぬ次は果木ふ乃をへしぬ外い木をとるる
はうの樹木をうるよい菓を出をしぬ花を次を
しを樹をを又を次しをす果はむ人は豆あるを
をくうへしぬをはは橘柑柚ををくうへし
をのうて蔓しるはうはうをるをはをはを
はは柳梨栗椒ををはをはをうへしぬ花
木は梅をををすぬ梅ようしぬ櫻木ようしぬ
くうるうへしぬつぐををむ久へくをはて菓る
はしぬ接バ活ををくはるをくしをくぬ海棠躑躅杜

能花もしは素樹ハ松杉檜金松五葉松冬
青樹なとうゑ竹を水方に多くうゑて
をきぞうをして時用に備へおくべしハ柳楊松
柏なとうゑ竹をいむ陰きふく夏ハ
牧多くしてうるさしまた菜ハ四角の畝をつくり。
宅中みなるハ新しくかく市ふうふ陰をもて
菜ばたをつくるいきハ四とをとハしむる
事花菓ハ此ことハ

巻之三

訂正 家道訓巻之四

貝原篤信 編
西村敬忠 訂正

用財

第一の事皆法あり法ハ人ハもちゐる人ハ
もちゐる物を法とす法にて只もちゐる人
なき物ハいかにもちゐる物なり。家を治さしむる
ハ法ある人ハ法ハ人をもちゐれハ必財用つき。国
家にて家をたもちうる
凡家を治むるハ財を用ゐる法を知りて

くはしくこゝろをあらためすぶんを知りて
ものをこゝろにしてものをさるこゝろはぶんの盛衰
有之のあるべきものなる所いかゝ知るべ
きいつのよるべを用ひよくこゝろをこゝろく
ものをこゝろにしたがひこゝろをこゝ
らとおこるべきものなれども必
困窮よりいでゝ富をゆぶるべし今の人家れ
をしこゝろにして多くハ富をたもつ道をお
ろそかにすべし。紂と用ひたるこゝろ。殷

ゝり貧窮よりいでゝ貧窮あれハこゝろ
苦しむのこゝろにして親と生ずるものなり。
君子ハつゝしむべきハ人なほとにし
めぐまれ義を行ひこゝろ人ゝ
ゝ。ぶひとつゝのひゝ
ゝ。百行のきを行ハれ不ことある
ふ。たゞ困苦ていんとも
苦のゝさひ子孫よりてやすと成一

代々家をゆるがしめず。法乃細々
雜義とは。さかとき。こゝにもあるなんぞま
り家代々の道とゝ毎々かりてもちもの。
是人世の事のるゆゑ也。ゆゑ
家をおさめるを人は月来家をとゝ法と
めゝ。おゝゝゝとゝ。ゆゑ紙を用る
におごゝをいやさしもづゝ倹約を行る
ゝ。勤ゝ倹ゝの二は家をおさめる為乃
なり。此二乃道行るれば多寡よいゝゝ。

財用をとりゝかゝに勤ゝ倹ゝ二の道を行
なふをとゝにゝ。ゆゑ紙
ゝゝす。是勤倹と行ふ心法なり
勤倹なれば多寡よりゝ。財源よ
て家をたもち。財を人よりあゝすして
る是ゝぬ人乃多寡とすくひ。吉作給善
答意の礼義をゝゝの人ゝ能蓄ありて
不足ゝれるさひゝあるゆゑ乃変み倹人
あるゝ。是よゝく財を用ゐるなり

家を保つの道に勤と倹との二あり四民共に勤しれに家業あり其業より財産を得る基なり又家を保つのあり家おさまる勤しるハ是財産を得るなり倹約ハ財を失ふを防ぐなり倹約ハ財をたもつて失ふなり二乃者ともに行られて家道立ぬべしを四民皆同じく是

を行ふべし又勤しく倹との工夫へ進まるあり進ハこゝろゆるなり吾労をとゝろえずくるしきあり私欲をとゝろえずく倹約を行ふべし

飲食衣服家居器物ともに分よりすぐるべからず紀たるべし身上ハ分相応にすべし分をこえてかりをつくり借ふべし分をこえてをもはかりなくハ分相応に報ずるべしこゝろ身をつゝしみて財をおしむべし礼義を行ふべし人をもてなすべし肌ゆるすべからず

志ざしひ力と出さんとへ。紡とおしむへくしく。
見人とあそれ〳〵人よ陶いるの乃ちれを也
家の破れる亦そこあく修理し。家具或
そこの使へふるくして換しるハ改め補
ひ又ゆつまる笑ものけ換しる
ハそあく修復をへし。元ハ破乃財修理をく
くへされハ大破ハいそいむつ
仕る者ハ考ち活ひる福あり。農工商ハ又
ちひるる用地あり。家紡あり。

ま紡績乃ゑおよしく。ま分用して倹約
を行ひ。家人と書ひ家成ゑ。見君
又ちうけるのくなしく。天ち活る亦の
定分れ紡績ゑれハ。身ハ身貧富しも
にま家の紡績を用ひく事見ちわへし
見天命と安んして外を形はさる也。屋む
るをゆい亦の紡と備用ゑへしく。乃家績
乃分限ちるくしたいやせて必紡不見して
外ま備用ちふいる。見紡を用る亦はそ

して天命とやとんせさるべしと紂を用る人は紂孫の命おのづからしたがはるる而乃紂孫は分命ゆく事呉りぬ故乃国窮まるとせざるは家孫のあかりしなり

又世の風俗乃奏まるべく倹なるふるまひとぞ事不幸にはあらざるべし呉まず一応の倹なるべき意乃奏乃ならるにはれまぬ紂失ちく去寡奏とぞ人の世なるまつる伝とへしぞ意とあまつ法あり

古人の紂と用るぞ紂孫の分沼よ意してあるが事なるべしは国窮まる人を くれし上より下にひしひしくらく まるい害ふしてまり上を偽して 考き人のまねまるいたるとがあり

紙を用ふゝをはんて大よいてるなゝおゝ乃
費をもおしむへし。紙をもやむをえ
ずしてかけ費いをしたゝ大なる害れ
一時に大なる紙を用んとおもふて必粉張し
てくるゝるへしやむをえずこゝろをく
費をへらしかゝ乃費とはんて百ゆいてうて
も粉大なる費一るゆいこれをもつるはゝしへし
をもつるはゝしへし紙

家とおさゝ紙を用ふゝ事ゝふゝを用ひ
て精しくしこゝはやうゝあつて硯墨ゝる人ゝう
もおごゝしかゝをふゝなゝしるを不及ゝくゝゝ
程ゝゝ人ゝ用ひるゝをいかゝれゝ不及ゝ
ゝゝいかゝをふゝなゝゝ。ゝあゝくゝして大ゝにと
乃ゝゝゝゝれを紙の用ゝるを不及ゝ。
成ゝゝゝ成ゝをふゝなゝゝ。ゝあゝよへきものを
今へとおゝふゝまゝきゝのゝあゝ人多ゝゝ
ゝるゝゝ考ゝゝれゝくゝ。すゝゝゝる人きゝ

ばかりすれば事をしむるに理あるべしと
見ることを用ひざる時は精しかるべき也
君より孫に伝へをはるに事なるべし
なり。されば孫に伝へる事は
失ないさるべきなり。孫伝をはる事は
幸ひにしてもはる人あり。材孫と名をつけ
うまないさるべハ捨てけまて成べし。音
あるべきはまたも捨てして失べし人ばか
りにて材孫あるべ人を捨ばとはしん

てを材孫をすべつへし。又材孫をむさかり
分外の冥代求めべくこの子孫のくさんを白ん
より家法を正しくこの子孫より道乃を
えぬのことは也。子孫をなれへ
材孫をのこせしも必失べ。冥民皆かくの
ごとし。材孫をたゆしてこの子孫
を久しめんと祈べ。只仁をば
人をあれへべくこの言を約をつ乃
孫こ子孫こ言代をえをむべし。

是天道の理なれい自然に人事
なるさいくるるまくもも後に必天乃めぐみを
うくへし。是系金銭ととく神佛に願つ
ひいのるよ百倍をる利益ちり。是につが私云
にわ〳〵ぷ〳〵乃ゆ〳〵こと元人のとゝえ古今
のゆあ〳〵ゆゝうゆゝふゞりゝ
材を用る法を礼記乃王制よりいつり。曰材用
と制をるふ入るこゝ銭をうて出ると事を
みとゝ云こい年代書よ今ゆる不の材乃

分限とゆゝくゝゝ分限の人ゆよりつゝひ。
ゝゝ年の事凶にりてゝれよ為て来ゝ
ゝてつゝひ用る分限と定あく。ゆゝくゝつり
乃くはゝひ用る事を節あとて。ゆる
ゝの材乃分事よりゝくれく用るいより。
ゆゝ不よりゝくゝ多れを材不足一家
困窮ゝるいゝゝゆ。是と入をゝゝり
て出ゝゝ銭よゝくいふゝゝと費銭ゝ
ゝゝどりどいゝゝめく。滅へきほく紙材と多

くるくるくる凶年火災盗賊疫病死亡等
の変を修つくしぬ是万世紀を用る乃良法也
いかゝへいこと年耕して必一年の余あるべい
てり此ときい農人いこと年田代つくれて一年
乃食の給計あり多くて四所の田地を作
くれて三所乃ふるまひをれ一所れたり
りしを蔵して用しかどこと年るとれて三所の
ありりしい乃給計出くぼゆへよたくい水旱
風霜の凶年よあしくく五穀をのこされ生

仇僅乃患ちく材用事りけを士〻工商乃
家も凶年とりつくもちるくしを是とりつくた
りふゆりへ乃はいゆ士を若り結る西
乃猟を毎年四よ口ちこと分を用ひて一
分をはくくく蓄くく用しを一分を三年
ひさあまいこと分〻ちる教りい凶年いおひ
変りあしくくも困苦のくまひるゆ三
分乃一をくくく蓄くい凶年乃くるゆ或多
火盗賊不この変をたをけ又鰥寡孤独

をも他人の困窮をもとくりんでゝあたりぬ是
いのゝ財を用ゆる乃はたぶはをなるべく
貧民ともして財ゆゝふかして多窮乃うまひ
なり。是古今通用とゝき良はた也
元文年の世乃勢い。年ゝふ第のるは必義貴
よりもひさて。おごりついえおほくなりて
ゆくゝの者れて。倹約をもひとして約るいを
して。只ゝまゝにく世乃成行ゝまゝなぬ
まは。人ゝ困窮して怨をたゝらゝ。怨

ゝるゝを所ゝようゝりゆゝて倹約の道をとし
てぶよい必要をゆゝるゝいゝゝんし。おゝゝゝ
なる人をゝゝくいゝるゝをくおりんいゝるゝ
第のゝりい去を死後乃りすをゝるゝくおりんはう
らされを必ちゝきゝまひおりゝりゝ憂動
ひれいはい必要ゝ出ちゝ。神ゝおゝゝりて仏
を用されを後い必ゝうまひゝるゝゝゝるゝぶ
理をゝくおりんいゝるゝ
財の用ゆゝゝたゝくあゝきゝいゝたゝくゝ今見才

二人あるべき家乃付縁の多張も人の口数も同じく父のゆるまる付も同じく父の偽
掛乃外ひらけたるも同じ。絶まて家れ貧
富と又同じ。ゆえに一人家ゆるゆ
りよ家不足なし。一人は働くせいく
ちくつ。たとうて利よ利を加へ
て。人よあくらくれて付とついやしたて。
後よいきうれるまめをたくのうと。年くよ
加ゆく貧困よいる。先ちふ故ろや付乃

用ゆきとくあり。きといくれうぶたくは
ほと物人いるまて今をつくしゆ。ありき
ハけくらちり
天地の事滞きハ必変をれて風雨水旱
地震なくの異くある世界の始久くに
川まれく必変る。人乃事血飲食めぐり
ぶて滞きハ必病くある。付変もおほく
あつくく人よ旅しくくされハ滞まく
ほ用乃ひさワひくくる。老ゆも多くあつ

ひとしかるべきなり。されどいにしへ乃ち必絵乃
乃印也。紋多くあんまりに多き者なる人は
ことごとく紋を多くあつめ人はとこ
さすがに孫子孫子にいたるまでも。火災
逆縁なくあるべきの災変はあひ紋をう
しなひ或子孫乃不法にして紋をう
しなふすべ古今世にまれあり多し。紋を
あつめくさいくるとせんにまれ紋をあつ
めるまでもあく人はほとさきへ必ときへ

ひとしかるべし。庶民乃紋絵の栗。おごりてを
なりらくし。鄙通が絵乃紋。石崇が金谷
の富も不法にして作めは失ふべし。皮孫
をひさはり紋をあつめくる孫はのこせ
しもいつまにか仁恵をおこなひて積善る
名れを大道とするもそ後の修善なり。
上子孫不肖にして皮孫しく紋を
なりらくして品法をおこなひつつ
居をれひとく人をひとしく孫をも修

福をのこし又義方の教をなして子孫乃
行を正しくせんことハ子孫のさいはひにハあら
ずやされバ身一人にて福禄を多くうく
るをハ天道にいみてかくて子孫にハ福の
こらずされバ身のさいはひのみてるをとの
ミてやのちの子孫のため福をのこすべし
是自福をうくることをへらして子孫に福を
のこしおくにあらず是無知者のする所也
財を多くたくはへて終りあらバ人に益あらず

身つから用ゆべし是益ありといへど貧なくして財
をたくはへ用をハくつろし幸なりとしるべし君子
の財をつかふハ用ひきりて世の人に益ある
所に財を用ひてむだに用ひ人に百金
銭をたくはへ千金をもちんよりハ千金
銭を出して飢る者貧人をすくふハ益多
し又百金銭を出しておしみ嫁せしむれば
十金銭を出して子を教ゆる人にしかず古人いはく
つり又大富なる人も一日の用ゆる千金を費

いやしてをしまの為にをちやせるも。百合と出し
て飢るる人をたすけんとすんしやや
わの身の苦しみすくはんとして又母の苦をあつく
とゝのへ。涙は兄弟親戚朋友に恵まれ貧窮ちる民
をすくはんとして。まづ飢を救ふとなる者をたすく
る。民は樂しむとゝのへ。親戚のしたしめ嫁とゝのへき
附よりてれも。貧窮ちる嫁となる力なれば
あるべからずとりちらあらい紡をたとけて嫁
やしなひ。凡紡わいはかくのごとく有益のゆ

をあつとゝのへ。紡を井に出入りたるちらしに
きるしくはくこゝとゝのへ。ぬくを紡るひて
人をたとけいあるべくこゝ紡却わくりてるひあ
ひ民とゝる事ひくくのこゝれいあるたい
しくとゝや。乃理をきるこゝる人をゝ多く乃紡
をとをいやゝ。ゆを益のゆとなりて義理よをむ
く事多ゝ。紡貴を多くついやゝて道理
みろしくいむぎに長るゆりよくわさまんて益
益のゆよ紡とついやさに益あるゆは紡を

月毎にしかくのごとく長式行なひて人とともに人は必ず大道乃正めぐるに源くくやさいひろく福を求し。長生の行績をなすべきなり神佛にへいしよはらうに陰さうして志はし大なり。長智乃人をば程と志は道なくして外行よりいかい外仏を思ふ。私ありとしてあさむきなるを也。神佛乃ちよりもひろく。ふんをかるる人は利生あるんや

元祐とおしみくい長式行なひて成りくく功を長原すべき為なりくしかる人乃ちをば行なひて人思ひつづくべ乃和なる故事を求しめさくやうなりゆゑに軍に長式ようく行なひて士卒ともを勇戦をなすべきなり。こ時に香餌くとはいえ八士卒ともにけくなく軍功も立さしめ。其香餌乃わさりひなり。俗俗てり小敵大損と云ふなり

人もし富をあつめたうとくさくらくとなすは
ひとり天より我一人のあるにあらず多く
く人をとくいとなんためみまれみさつきさ
まよりおのくに天命よりたくしたくはひよ
仁義礼乃をもちて貴賤をあつく能
僅とる者をとくしくに義理をもつく
乎ものとなすべし是天乃作なるもの也。
かくのごとくあるにあらず富をもつるうしあるて大なる
乎ものとなすべし紂を多くもちてもわるるひと

又は作者をおごりひとにはしることなくして義を行
はさるは無用の物なり。石瓦をあつめてく
用にしたがひ人を害し虐とし古人の云へる
もしひとり紂をとりてるのみにあらずして貴賤
乃人と同し
紂と用る道を考て貴賤をもれて父母をわ
しりまつることなくして人はあるべきものをあく人
をとひをめくむるものあり人乃をしいをを
人さひ廉恥乃道行なれてなく人のめくる紂

うきをくむしくしひと。官をたりてまた名をもれん民をむさぼりあやまちをくわ。大義とつとめんうこと。礼義をそむきたる術なく害ある事皆是国家よりおこる。国家い倹約をもとさるより おこれり。まづる故に倹約を家とおさむる要道なり

扨て人家においてうるいさる物乃外。無用の物をもとめんもくりくされて。己のまつしひなく財のついえ別

悪物い形々用ある物と変じて。無用乃奇物と変じするハ。價い多く費えくわう用ふ。ふるすいまれなり。常に用ある悪い價の費ハとく形にて用ふる多し。物うくれ変をたうとふハ古人のつとめ也

わが身をつつましく。財利をむさぼり。吝嗇まして廉恥の志なく。歌戯故舊の交絶

とれて志ある人。郷里の飢饉をすくはんとつとめて。歌戯朋友

乃礼義をつとめ行ふべし或あるいはき者よあるいは
とかくはかりきわをしらず人の財を用ひく
ばくのくにぶのけ事わが身よりもあるいは
見とをいまし人〻の人のまれあるきをとるも
皆わが身のあるべきちからをはじめ人〻ハ見と学ま
ひ西をとんくハつまり身あるを見あるゆくく人
つまるべし世をとれ人〻の善悪をとんく
皆まるべき身れ差まるべ人のあるきをそし
らをして我身をとく人〻をとるべ人〻おそれ

寡孤獨を苦窮みてたよりなき者をわが
分のうちをつくしひ力のほどをはかりて
これをとをつよ紂と申し人〻いひんとな
きハまるべ身彼ををとくふかく財あるハ天の
つとひ人〻よわの身よさいとるしのあるべ
ひ貧苦ある者をとくハ救めんとそ思れ
よたりをとあるべ富しえ程なれ天の
恵をうちをつくひて貧人をとをひほとこ
とを人〻しのみ見をとくハされて天乃恵なよ

そむきて天をおそれざるひがことなるべし。天道より
うけ得しさいはひをちらす事に用ひずして、末
らきにてもむくひなかるべけれども、のがれがたし。
此理必たがはざるべし。是天のおそるべき也
易に天道ハ盈てるをかくといへり。又挹るれハ化
かくるともいへり。又古語に多く蔵れハあつく
失ふともいへり。財多くあつむるものそに
て人の貧窮をめぐまざれハ、ちらさで必
わざはひあり。天のおそるべし

人の悪事をかたるをこのむべからず。人を妬く
家る事を恵むべし。人用あらハいかにもたすくべき
ほどハ不自由をこらへても人の急をすくふべし
然れども我やむ事を得ずして悪をなすハ、そこ
なふべからず。用ひ終らハ、たしかに返すべし
久しくとゞめおくべからず。ぬしに事をかゝせ
こひ借をきらひて、おそく返す人あり。その
かるものの損ぜバ、よくつくろひてかへすべし
附し返すべし。すべてわが家に人の財貨

器物書籍等をかりて。かへさゞる者あり。や
ぶりそこなふべからず。かりたる物
あらバすみやかに返すべし。是又家をおさむ
る道の内也。一季たらずかりたる物ハ
物を置く。かへさる物也。ひとをわすれずおこさ
ずしておいめ代返さずある事あり。かへりみず
まくる人とすべし。是又家を興すべき也
商人ハ貨を買て財をめぐらし用ひて。其
利をえるを以世をわたるわざとす。然れども商

人の物をかりて返さずして。利を得てゆく〳〵の
へ也。商人も財をめぐらして利を得る
し。たゞし後日かならず返すべし。あるま
じき事なり。のがさる君ハ日々に用ふべき
利をえんとする商人のうらみとなる也。
たとへバ人の財を借りて不自由なる事を
て物をかへさるべし。凡かりたる物代返さ
つる物のあとまで。とてのがされず。財主の
うらみをうけ。人のうらみの

つくの天猫おそるべし
人の書と申しハ
を写一日人々まく返をすべ人の書ハ
すべて久しくとゞめ置い扨ゝ
写書も二日ハ一冊ゝ人々ゆゑ中冊乃書ハ
六冊ゝいハ日小人々まく返をすべ十冊ゝ
らハ十日小人々まく返をすべ久しくとゞめ置
るゝ人ひつまく返をいハ人も又くゞめてわゝま
ゝ元学者の名を用ゆゆきるなり

人の書を申しハ扱汚ゝ屋漏あるゝり
猫鼠あゝ失油臓小児のあゝだとゝ
ゝ書い写ゝ入置ゝ人ゝ附取出ゝ
しゝゝゝひけゝさい扨きゝいくゞゝあわ
まりと謝して返ゝ人ゝ見又百分乃一也。
扨ゝ人ゝ書ゝゝを用ある附事ゝ
きゝ人ゝ申ゝゝ見ゝい書を
ゝる人扨ゝいゝくゞゝ返ゝ人ゝ
人ゝゝる人乃名ゝ書ゝ紙ゝあゝれゝ

てうとくをしむべし。富める人すべて書を
見るまねをこのみとも書ばうはされハぞみす
とゝ成べし我ら書ふあるべきされハ用あるはかゝへ
ゝ。紙多き人い書を賞ずるもしむべし
わが身の作書よおごる人ゝ必紙をおしゝて
人よりほゝこさべし紙多くれど人よりほゝこさで
ふい只吝嗇なるのみゝ不仁ゝ立下。紙
を惜ゝていに書い形ひゝゝと。程ゝのいる
ほゝこゝふゝゝる

巻之四終

明治十四年十一月十日鑿刻御届　芝三島町十番地　山中市兵衛

終